# 建築研究所ニュース

令和８年 11 月２日

応急危険度判定調査のデジタル化に関するマスコミ向け公開実験について

～実際の建築物を使ってデジタルの入力支援ツールの導入効果を
定量的に把握する国内初の実験～

大規模地震後に実施される被災建築物応急危険度判定（以下，応急危険度判定）調査は、紙の調査票による調査・集計が行われることが多いため、建築研究所ではスマートフォンなどに判定結果を入力し、クラウド上で集計できるデジタルの入力支援ツールの開発を進めています。その一環として、実際の建築物を用い、被災市街地での応急危険度判定活動の実施を想定した屋外実験を実施して、デジタルの入力支援ツールの導入効果の定量的な把握などを行います。

つきましては、以下の実験を報道関係者に公開します。取材に際しては事前申込をお願いします。

**＜公開実験の概要＞**

日時： 令和8年11月7日（土）11時～12時頃（荒天時は11月14日（土）に順延）
場所： 国立研究開発法人建築研究所 多目的実験場（〒305-0802 茨城県つくば市立原）
受付： 多目的実験場入り口にて10時45分から開始
実験内容：
・多目的実験場にある2階建ての実験用住戸を被災建築物に見立て、応急危険度判定士が紙の調査票とデジタルの入力支援ツールを使って判定を実施
・その際に計測機器を装着し、調査時間や活動量・疲労感等を把握
・判定は2人1組で、10組実施予定（公開は最初の組のみとさせていただきます）

**＜取材の事前申込方法＞**

11月5日（木）17時までに下記問い合わせ先メールアドレスに取材者の氏名、連絡先、人数をお知らせください。当日の詳細や雨天順延等の連絡を電子メールでご案内いたします。

【お問い合わせ先】
国立研究開発法人 建築研究所
所属 住宅・都市研究グループ
氏名 北村智顕
電話 029-864-6766（直通）
E-mail t-kitamura@kenken.go.jp

## ＜実験の背景・目的＞

大規模地震直後には、余震等による二次的な被害を防ぐため、被災した建物の倒壊や外壁の落下などの危険性を判定する応急危険度判定が行われますが、未だ紙の調査票による判定が多く、判定結果の集計や活用に時間と労力を要することから、調査のデジタル化が急務となっています。

これまで建築研究所では、応急危険度判定のデジタル化への技術的な対応として、タブレットやスマートフォンを活用した調査票への入力支援ツールを開発してきました。全国被災建築物応急危険度判定協議会（事務局：一般財団法人日本建築防災協会）の協力のもと、入力支援ツールは社会実装段階に入ってきました。

自治体による入力支援ツールの導入や定着に向けては、庁内外の理解増進のために、定量的な効果を提示することが求められています（例：1 日当たりの調査可能棟数等がどれだけ増加するか、1 棟当たりの調査時間はどれだけ短縮されるか）。また、応急危険度判定士の負荷軽減の効果を把握することも課題です。
これらの課題を明らかにする本実験は、国内で初めての試みと言えます。

そこで、実際の建築物を用いて、被災市街地での応急危険度判定活動の実施を想定した屋外実験を実施し、入力支援ツールの効果や、応急危険度判定士の負担を定量的に把握することとしました。

なお、本実験は全国被災建築物応急危険度判定協議会及び主に関東地方で登録されている応急危険度判定士の方々の協力のもと実施します。また、弊所客員研究員である千葉工業大学創造工学部都市環境工学科　寺木彰浩（てらきあきひろ）教授の監修・協力のもと実施します。

＜参考：応急危険度判定について＞

応急危険度判定のステッカー貼り付け事例※1

応急危険度判定のステッカー※2

屋外実験のイメージ

入力支援ツール（スマートフォン）

※1　出典：国総研資料 No.929 号、建築研究資料 No.173 号「平成 28 年（2016 年）熊本地震建築物被害調査報告（速報）」、p5.6-12、2016 年
※2　出典：日本建築防災協会HP　https://www.kenchiku-bosai.or.jp/assoc/oq-index/

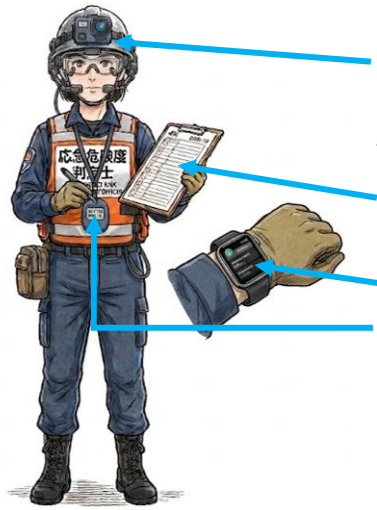
## ＜実験の概要＞

国立研究開発法人建築研究所の多目的実験場にある2階建ての住戸を被災建築物に見立て、応急危険度判定士が、紙の調査票と、スマートフォンでの入力支援ツールをそれぞれ用いて判定を行います。

カメラや計測機器の測定結果等から、デジタル化による判定の効率化度合いや応急危険度判定士の負荷軽減の効果などを定量的に把握するための基礎資料を得ます。

### ○実験手順

①計測機器を装着（下図参照）した応急危険度判定士2人1組で判定を実施（実際の被災地と同様）。
②紙の調査票、または入力支援ツールのどちらかで判定を実施
③15～20分の休憩
④もう一つの方法で判定を実施
⑤終了後、応急危険度判定士にアンケートを行い疲労感や気づいたことを聴取
⑥これを合計10組20人に実施

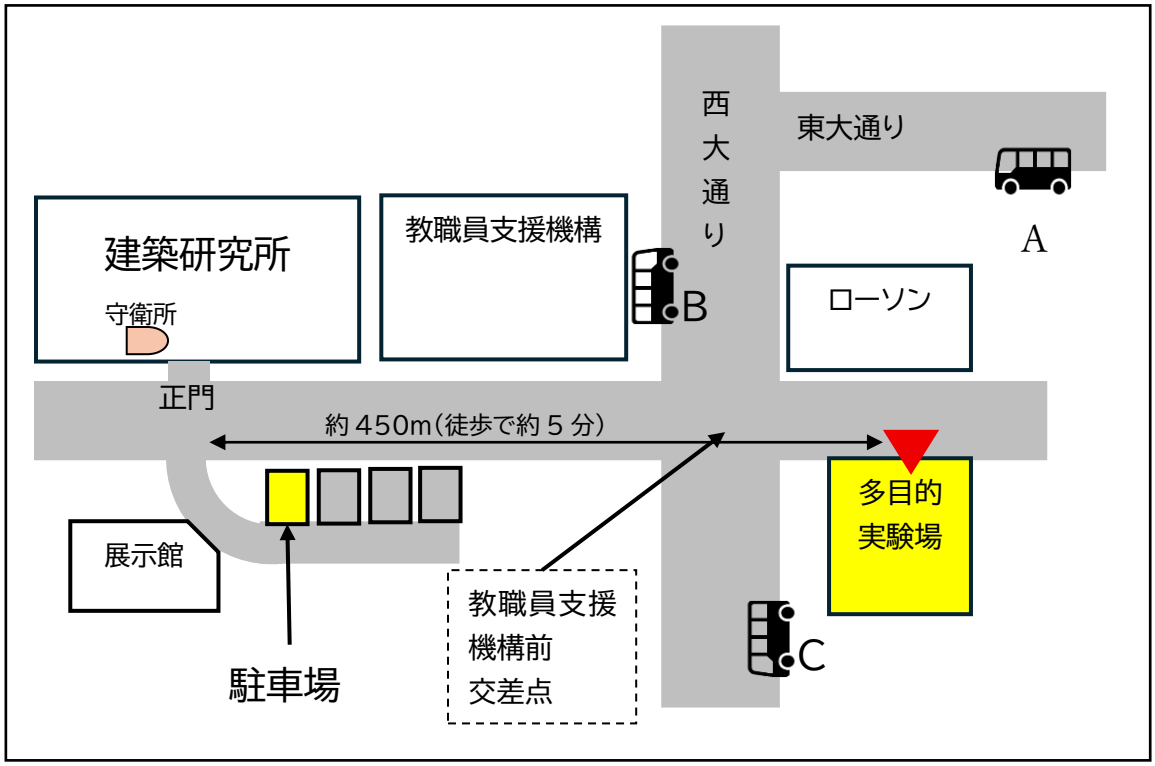


図：応急危険度判定士のイメージと各計測機器の説明

■判定士が見ている場所を記録するため，カメラを装着。また，一部の方にはアイマークレコーダー（眼球運動を非接触で計測し視線を記録する機器）も装着
■紙の調査票、もしくは入力支援ツールをインストールしたスマートフォンを使用して判定結果を記録
■心拍数などを記録するため、スマートウォッチを装着
■歩数や消費カロリーを記録するため、活動量計を装着

※このイメージ図は，生成AI（Copilot）を用いて生成し，人間が修正を加えています

＜実験会場・交通案内について＞




・取材を希望される方は、11月5日(木)17時までに取材担当まで電子メールでお申し込みください。折り返し、取材当日の注意事項などをお送りします。
・実験場が十分に広くないため、各社2名までとさせていただきます。
・判定実施中の実験エリアへの立ち入りや、計測機器などへの接触、判定士への個別の取材やインタビューはご遠慮ください。ご要望があれば判定実施後にインタビュー等をお受けする時間を設けます。
・当日小雨程度であれば実施する予定ですが、荒天により実験を順延する場合、11月6日(金)12時までに判断し、登録いただいた電子メール宛に個別にご案内します。

**◎車でお越しの方**

・実験場所となる多目的実験場には駐車場はありません。建築研究所駐車場(弊所正門の南側)をご利用ください(多目的実験場まで約450m)。路上での駐停車や周辺施設への駐車はご遠慮ください。

**◎バスでお越しの方**

バスの便が少ないので往復の時刻表とバス停をよくご確認ください。

(1)つくばセンターから
つくバス北部シャトル「筑波山口」行に乗車
つくばセンター発10:10→大穂窓口センター10:28着(地図Aのバス停)
※多目的実験場まで徒歩約10分

(2)研究学園駅から
つくバス吉沼シャトル「やすらぎの里しもつま」行に乗車
研究学園駅10:10発→教職員支援機構10:27着(地図Bのバス停)
※復路は地図Cのバス停から乗車